

報告

社会活動委員会
令和元年 社会交流セミナー

『みんなで考える となりのヒグマとのつきあい方』

滝澤 嘉史

1. はじめに

社会活動員会では、一般の方々を対象としたセミナーを年に1回の頻度で開催しております。技術士と一般社会とのより一層の交流を深めることを目的として、社会交流セミナーへ名称を変更し、今年で2年目の開催となります。本年は、令和元年11月28日(木)15:00~17:00の日程で、ホテル札幌ガーデンパレスにて開催しました。

講師に、北海道立総合研究機構 環境・地質研究本部 環境科学研究センターで研究主任をされている近藤麻実様をお招きし、『みんなで考える となりのヒグマとのつきあい方』と題してご講演頂きました。

近藤様は、三重県津市のご出身で、岐阜大学農学部獣医学科在学中にツキノワグマ研究会という同大学のサークル活動でクマと出会い、以来ツキノワグマから13年、ヒグマとは9年間、係わられてきた方です。同大学博士課程修了後、北海道立総合研究機構へ就職され、ヒグマの生態や被害調査等に従事され、現在はヒグマとアライグマの2種を担当しておられます。今後は、人と野生動物とがうまく折り合いをつけて暮らしてゆくための正しい知識の普及

啓発や被害対策に取り組んでゆきたいと、精力的に活動されています。またお仕事の傍ら、日本クマネットワークニュースレター編集員としても活動されています。

当日は、技術士・技術士補59名、一般の方30名、3名の報道関係者の参加がありました。参加者の合計92名の内、35.9%にあたる33名が技術士・技術士補以外であり、一般社会の関心の高いテーマが選定できたと思います。以下、開催報告をさせていただきます。

2. となりのヒグマとのつきあい方

ヒグマの分布は、1978年から1991年にかけて大きく減少したため、それ以降は保護することになりました。しかし、これにより2002年から2011年にかけて分布が回復、拡大し、今日のように「となりのヒグマ」とつきあうことになりました。

セミナーでは、ヒグマを知る、出没の背景、ヒグマ対策の現状と課題の3つの観点からヒグマとのつきあい方を説明して頂きました。

(1)ヒグマを知る。

ヒグマは、冬眠し、夏の交尾期を経て、秋に冬眠準備を行って、再び冬眠します。冬眠時に出産します。ヒグマはわずか400gで生まれます。

春は、山菜取りで山へ入る人が多いため人身事故も多く、冬眠明けのヒグマは凶暴といわれていますが、決してそういうことはありません。冬眠は、食べ物が乏しい冬を乗り切るためのヒグマの戦略です。食べ物が少ない年は早い時期から冬眠し、食べ物が豊富な年は比較的遅くまで起きています。

夏は繁殖期ですが、子別れの時期でもあります。



写真-1 ヒグマをテーマにした話に聞き入る参加者

メスは生まれた場所から比較的近いところに移動して生活します。これに対して、オスは近親相姦を避けるため遠くへ移動します。これを分散といいます。

ヒグマは身体能力が高く、冬眠のための大きな穴を掘ることができます。また、俊足で、自転車が時速 15km、陸上のボルト選手が時速 45km に対して、ヒグマは時速 50km で走ることができ、木にも登れます。

食生活は、春先に草花や山菜、夏場は野イチゴ、クワ、ザリガニ、アリ、秋はドングリなどの木の実を食べています。これらは、クマの置き土産(糞)で確認されています。クマの糞は、植物主体の食生活のため、それほど悪臭を発生しません。なお、鮭を食べる熊は、鮭が遡上する河川沿いに生息する知床等一部のヒグマに限定されると考えられます。基本的にヒグマは水が苦手なようです(写真-2 参照)。



写真-2 ヒグマの生態について説明する近藤氏

ヒグマには、立ち上がって耳を澄ませ、辺りを窺う習性があります。このような行為が威嚇していると勘違いされますが、ヒグマは鼻と耳がよいので立ち上がることで頭の位置を高くし、相手を確認しようとしているのです。決して威嚇しているのではないので慌てないようにして下さい。

ヒグマの指は、5本あります。オオカミや犬は4本ですので、野山に残された足跡をよく見ることでそれがヒグマのものなのか判別できます。また、ヒグマの奥歯は、雑食性のため人間と同じように平で表面に凹凸があります。ヒグマとオオカミは頭蓋骨が似ていますが、オオカミは奥歯にも牙があるので見分けることができます。

ヒグマは縄張りを持つのかということをよく聞かれますが、ヒグマには縄張りはありません。生活の場として行動圏があり、一つの場所に複数のヒグマが住んでいます。

ヒグマには学習能力があり、おいしい食べ物がある場所、ハンターが来る危険な場所等を覚えて、経験に基づいて行動することができます。また、人間とは、無益な接触を重ねることで慣れします。

(2) 出没の背景

ヒグマ出没の理由は以下の2つです。

- ①そこに簡単に、一度に、大量に手に入る食べ物があるから
- ②出てきやすいから(ヒグマの生態と地形に起因)

一方、ヒグマの出没が増大した理由として挙げられる意見には「ヒグマの数が増えたから」、「ヒグマの分布範囲が拡大したから」等が寄せられます。

春、初夏、晩夏、秋の季節別にヒグマの捕獲数をみると、初夏から晩夏にかけて増加傾向にあります。これは、初夏から晩夏にかけて収穫される農作物を食べて駆除されるケースが多いためです(写真-3 参照)。また、捕獲数と農業被害額を比較すると、捕獲



写真-3 季節別の捕獲数を説明する近藤氏

数の増大に伴い、農業被害額の増大傾向が確認できます。このようなデータを見ると、出没の増加は数の増大や分布の拡大だけでは説明が付きません。

また、「森林開発によりヒグマの生息地が奪われた」、「山に食べ物がないからだ」という意見もあります。50年間の北海道の森林面積をみると、天然林と人工林の比率が若干変動していますが、550万 ha で一定しています。一方、ヒグマが大好きなデ

ントコーンの作付面積は、ここ数年であまり変化していませんが、100ha以上の大規模農場の割合は3割増えています。

全てのヒグマが農作物を狙う訳ではありません。農地や市街地近郊にヒグマの行動圏がありますが、一度も農地に入らない地域もあります。一方で、継続的に農地へ入って被害を出すケースもあります。何かのきっかけで農作物を食べる経験をしたヒグマは、「畑に行くと食べ物がある」、「人里に近づいても何も起こらない」等の不適切な学習をしてしまい「わるいクマ」になってしまうのです(写真-4参照)。

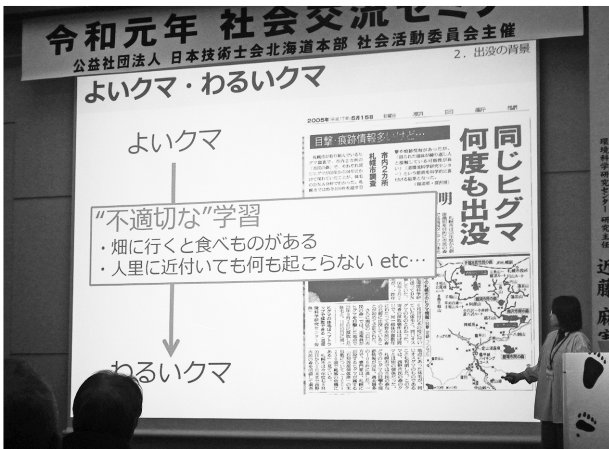


写真-4 よいクマ、わるいクマを説明する近藤氏

不良農作物を畑に廃棄している農場がありますが、このような行為は、おいしいものがここにありまるとヒグマに宣伝しているようなものです。また、近年では、後継者がいないために営業を止めた廃棄果樹園もたくさんあります。このように、ヒグマにとって「おいしいものが食べ放題な環境」が人里周辺に整いつつあります。この状況を放置することが、人里周辺への定着や出沒の多発につながるのです。

(3)ヒグマ対策の現状と課題

以上の背景を踏まえ、ヒグマが出沒しない環境を整備するには、ヒグマが出沒する2つの理由をなくすことです。「そこに簡単に、一度に、大量に手に入る食べ物があるから」⇒理由をなくする：誘因物を管理する。「出てきやすいから(ヒグマの生態と地形に起因)」⇒出てきにくくする：隠れ家となる茂み等を刈り取る。電気柵を設置する。

誘因物を管理する対策には、畑地の周囲に電気柵

を設置する。キャンプ場のごみ箱はヒグマが開けられないような構造の蓋の設置や構造を頑丈にする等があります。

また、出てきにくくする対策には、人里との境界に電気柵を設置する。道路や川沿いの茂みを刈り取る等があります。

しかし、この対策は、いったい誰がやるのでしょうか？対策手法はあるけれど、経済的・労力的な負担が大きい、農家ばかりが対策を強いられるのは不公平ではないか、廃棄果樹園等を管理する人がいない等の課題が生じています。

そこで、安全はみんなで作るものという観点から自助、共助、公助による対応が紹介されました。農家は自分の畑を守るために電気柵を設置し、廃棄農作物は、放置せずに責任をもって処分する。また、共助として、皆でゴミ出しのルールを徹底することで、ヒグマが出沒する誘因を作らない。出沒しても長引かせない。刈り取りを協力して行い、ヒグマが出沒しづらい環境をつくる。公助には、情報提供、資金的補助・支援、学校教育、地域への指導普及、出沒時の判断や対応があります。

公助は、市町村や振興局がその役割を担いますが、現場にはヒグマ専任の担当者はいません。キツネやシカへの対応も必要になり、さらに樹木にも対応しなくてはならないので、鳥獣専任担当者もいない状況です。担当者が鳥獣に詳しいとは限らず、数年で異動することもあります。そして、ヒグマを撃つことができる狩猟者も減少しています。このため、ここ数年で防除の重要性がますます高まっていますが、ヒグマによる被害額はシカと比べて小さい、環境部署は予算を持っていない、農業部署は関係ない等の非協力的な意見もあるのが実情です。

駆除という間違った対策でヒグマを殺してしまったという過去を批判するのではなく、出沒させない対策を考えることが重要となります。ゴミを正しく出す運動に参加する等、一人ができることを確実に実行する。一人がだらしないとみんなが迷惑してしまいます。

最後に近藤様は、「となりのヒグマとこれからつきあっていくために」自助・共助・公助の精神で向き合ってゆきましようとして締めくくりました。

3. ヒグマグッズに触れてみて

当日、会場にはヒグマの毛皮、頭蓋骨の模型、手足のはく製、赤ちゃんヒグマのぬいぐるみ等、数点のヒグマグッズを近藤様に持ち込んで頂きました。参加者は、これらに直に触れて、ヒグマを身近に感じることができたようです(写真-5 参照)。

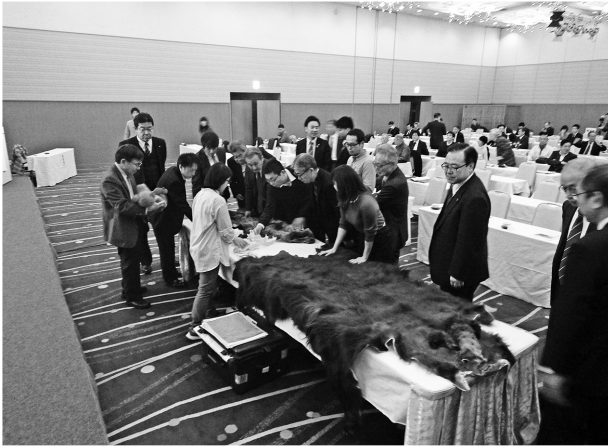


写真-5 ヒグマグッズを手取る参加者

4. 会場からの反響

近藤様からの説明が終わった後、会場より活発な質疑応答がありました。

「クマ対策には人が必要とのことであったがセンターでは現在何人で研究しているのか ⇒ 3人でやっている」、「現在自然環境の観点からちょうどよいヒグマの数はあるのか」、「ドローンやAI等の最新技術を駆使した生息調査等のヒグマ対策が行われているがどのように感じるか ⇒ ヒグマの行動圏を脅かすようなことはやめてほしい。ヒグマは茂みの中にいるのでドローンで探すことは難しいのではないか」、「かつてヒグマ、エゾシカ、オオカミの食物連鎖があったので、オオカミを放ってみるのもヒグマ対策になるのではないか ⇒ 家畜被害が増えるので別な問題が生じると思う」、「大きな農地ではどのような被害を受けているのか ⇒ 被害金額の6割はデントコーンで、ニンジン等のあまいものの被害額が大きい。かぼちゃは種のみを食べる習性がある。ジャガイモの被害は少ない。」、「実際にヒグマに出会ってしまったとき、どうすればいいのか ⇒ 決して走って逃げてはならない。まずは落ちついて、ゆっくりと距離をとることです」等、一つ一つの質問に丁寧に返答されていました(写真-6 参照)。



写真-6 会場からの質問に丁寧に返答する近藤氏

5. おわりに

わたしたちは、市内の中心部に藻岩山原生林を構え、豊平川が沃野を潤す札幌市内や自然環境が豊かな市内近郊に住んでいます。緑が豊かで自然環境に恵まれている一方で、ヒグマが市民の生活を脅かしているのも事実です。札幌市内での昨年のヒグマ出没件数は137件であり、今年は8月末までに既に175件に達していました。ヒグマは、生命や財産を奪う可能性が高いため駆除することを考えなくてはなりません。しかし、「本当に駆除が必要なのでしょうか?」という問題意識から今回の社会交流セミナーの準備に取り掛かりました。

セミナーを受講された皆様は、その答えが見えたでしょうか?たとえ答えが出なくても、本セミナーへの参加が答えを考えるきっかけとなればと考えております。

最後に、お忙しい中、今回の講師をご快諾頂きました近藤麻実様へこの場をお借りして、改めて感謝申し上げます。

滝澤 嘉史 (たきざわ よしふみ)

技術士(建設/総合技術監理部門)

日本技術士会北海道本部 幹事
社会活動委員会
リージョナルステート研究委員会代表
株式会社アイネス

